

〈闘い〉あるいは〈表現〉への現在の根拠

主催：文化部連合会本部

私たち文化部連合会は、去年の明大闘争の総括の中で左記の文章を記した。

「1969年、我々は脳化肥大症という病気に取り憑れていた。……しかしその脳化肥大の実体は空っぽだった……。」さらに総括の結論的な部分において、「既製の合法機関（ポツダム自治会）とは何か、あるいは、その日まで延々と存続してきた運動とは何か」と自ら問い返し、文化運動の歴史的反省がないまま全共闘運動を組織化していった。既成の各組織も“同罪であった。以上あまりにも抽象的な総括でしかその実体は、『闘争に主体的に関わりえなかった主体と闘争との関係で総括した。事実的経過に側していえば、『サ連闘』を組織した時点において、サークルの「4号館統一戦線」と呼ばれるサークル自らの組織化でもって“消滅”した。ここにおいて文連とサークルとの対立、拮抗あるいは、サークルの組織化という文連の政治的関わりを指摘するのは容易い。しかしながら何故そうならざるを得なかったのかという文連自体の組織的疑問とさらに闘いへの表現の根拠が奈辺にあったのかが、現在、問題としなければならない点である。

明大闘争は、自己の存在を基軸にして、運動が転回されていった。にもかかわらず、主体と大学・社会との関わりが離反していかざるを得ない運動構造と何をもって自己を含んだ告発体として運動を推進していったのかという自らの発条のモチーフの連関である。その結果として自らの存在の根拠と闘争主体の基軸すら喪失せざるを得なかったのかという基因である。

たしかに“全共闘”と“ポツダム自治会”の二重体制を確立し、運動それ自体が構造的矛盾をきたすことさらに戦術論でしかない大学の“非”を暴露することでは戦いになりえないこと。たとえ大学が、教育・研究の場を破壊するといった、運動の現象しか捉えられぬ“単眼”でもって、終始、学生対策的な方法で運動を圧殺していったとしてもである。その帰結として改定の改革の一表現として「大学改革案」がある。『だがこうした大学の犯罪的行為を論いても闘いにはなりえない。なにも闘争が機動隊導入でもって圧殺されていったから敗北したのではない。たしかに現実的にはそうにはちがいないが、より本質的な問題として自らの表現すべき対象と自己の内部との自己葛藤の上で闘争主体として形成しえなかったからこそ敗北せざるをえないのである。

闘いの根拠とその体现である表現への自律を運動のプロセスの中で剝奪する運動の構造を創出しなければ、闘いが闘いとなりえないのである。

たしかに大学個別の闘争が、社会総体の変革なしにはありえない。その状況の厳しさに打ち勝たないかぎり、勝利しえない運動の至難さがある。『にもかかわらず、それを状況の厳しさに還元させてはならない。

文連に限定してみれば、運動にコミットしようとすればするほど運動から疎外されざるをえない意識と存在の亀裂といった2律背反した自己の在り様を凝視することでもって闘いえない『陥穽を掘り下げる作業を続けねばならない。

大学は一方において、助成金、学館及び4号館ロックアウトというサークル運動の停止、一方においてサークル運動の延長線上にしか位置づけられない大学祭を大学の一行事に仕立てようとしている。まさに破廉恥にもである。『大学“祭”はこうした矛盾の縮図である。制度的に呪縛された私たち（サークル・文連）は、与えられた時間・空間を逆転させ自己の所有した表現を獲得するかにかかっている。大学祭に関わるすべてのサークルは、自らの表現の根拠を展示の中に打ちだしてもらいたい。